

## イブ・タンギー作『弧の増殖』の鑑賞（中学3年生）

### —ロゴスの特徴とパトスの特徴の知覚に着目して—

立原慶一・安彦文平

中学生にとってあまりなじみのないシュールレアリスム絵画と、これと向き合う彼らの知覚や感性の働き方の関係を検討する。とくに造形的特徴の知覚から美的特性（美的賓辞）を感受することと、知覚に基づいて価値判断することの、意義及び効果を理論的に究明する。そうした切り口から推し進める実践研究が、今後に期待される学的発展性を探ってみようと思う。

「この絵の主題は何か」に対する生徒の回答を調査してみると、基本的に以下の三類型が主題概念として把握される。こう本稿で独自に定義する。それは知的なイメージが絡む「1. 概念的・知見的主題（非美的）」、抒情的なイメージが絡む「2. 情感連想的主題（非美的）」、美的感受に裏付けられた「3. 形容詞的主題（美的）」である。

本題材では、一方でいずれか造形的特徴（ロゴスの・分節的特徴とパトスの・総合的特徴）の知覚が単一的に積み重なることによって、主題把握（概念的知見的か情感連想的か）の仕方が一元的になされる事態を確認した。また他方で造形的特徴を拮抗的に知覚することによって、主題把握法が意外性を孕み力動的に進展することが認められた。美的感受の下に形容詞的主題が把握された場合、当該生徒は造形に関するロゴスの特徴とパトスの特徴をそれぞれ別個で対抗的ではなく、翻転的に知覚するのである。

本題材では、造形的特徴が一方でロゴス的もしくはパトス的なものという風に単一的に、他方で両者が拮抗的に知覚されるなど、造形的特徴の知覚体験が多角的に行われた。知覚体験が多様化し、それに導かれる形で「良いところ」と、「良くないところ」をそれぞれ記述させると、価値判断は構造的に進展する。そこではとくに四つの類型を生むほどの、差異化と充実度がもたらされた。

第一に、知覚法がロゴスの特徴かパトスの特徴かのいずれかの対象に限られることによって、また価値観が正か負かのいずれかに定位することで、価値判断は一元的になされた。第二に、知覚法が造形的特徴に関して拮抗的になされることで、価値判断に相克がもたらされ正負の判断基準が内面化された。第三に、一定量の美的感受が伴う形容詞的主題が把握される場合、知覚法が互いに異なる造形的特徴に関して翻転的に行われることから、価値判断のあるべき姿として両義性の理念への着目要請が、生徒の記述文から窺われた。

第四に、これまでの鑑賞授業内で美的感受が寡少もしくは皆無であった生徒でも、知覚法はロゴスの特徴とパトスの特徴を対象にして対比的になされる。かくてそれが導く価値判断の場面で、知的イメージと抒情的イメージが力学的に交錯することで、そこから美的特性が浮上し、それを感受できる機会が幸運にも恵まれた。

価値判断に対峙するための前提として、二種類の造形的特徴が知覚されたり、異なるイメージが呼び起こされたり、多角的に絡み合わされた。それによって価値判断の意義と効果もたらされた。こうした諸々の教育的知見が得られたのである。それは今後、効果を睨んで教育実践への価値判断の営みの導入が、組織的に目論まれる。同時に、それを中身とする実践研究の学的発展性が期待されよう。